

No. 1162

手染めの美

—愛知・岩倉—

尾張平野を吹き抜ける伊吹おろしに泳ぐコイのぼり。愛知県岩倉市・中本町の中島屋は先祖代々 400 年の“のれん”を誇るコイのぼり店だ。中島屋の主人、松浦斧三郎さんは12代目。竹ワクにピンと張った天竺木綿に紅で下絵を描き、その上をモチ米の粉を煮たノリで輪郭を描く。指先でしづらしながら同じ太さで描く。子供たちの塗り絵の要領だ。絵具は大豆のすりつぶし汁でとかした顔料。化学染料と違って色があせない。しかし、ノリが悪かったり、技術が未熟だと絵具がにじんでくる。長さ 9 メートルののぼりで 3 日はかかる。手加減が難かしく、一人前の腕をつけるまで 10 年はかかる。屋敷の横を流れる五条川、染めたのぼりを洗うには流水に限られる。1 日の仕上がりは 14~5 枚、根気のいる仕事だ。手染めの美しさを見せる武者のぼりが男子の出生を祝って家々にはためく。

障害を乗りこえて

四月一日から三十日まで一ヶ月間、体の不自由な人々について理解を深め、福祉を高める「身体障害者福祉強調運動」が実施されています。

東京都渋谷区初台で家庭電気器具店を経営する金子精廣さん 46 才は生後一年三ヶ月目に突然発熱、脳性小児麻痺による四肢体幹機能障害として現在に至っています。金子さんは障害にもめげず小学校から大学院まで自力通学を続け、その間現在の国立身体障害センターで聴講生としてラジオ、テレビの修理技術を身につけ昭和三十三年に修理を主とした電気器具店「共電社」を開業。以来経営者として従業員の指導、修理、伝票の整理まで店の総べて取仕切り、自分で工夫改良した車を運転外回りの仕事にも活躍しています。

金子さんの積極的な活動は国立身体障害センターの生徒達の技術指導、更生にも力を尽くしています。昭和五十年度の身体障害者福祉大会では、たゆまぬ努力によって障害を克服し、自立更生の実を上げ広く他に範を示したとして厚生大臣の表彰を受けています。

現在全国には約百五十万と推計される障害者がいます。その人達が安心して社会経済活動に参加できるためには障害者自身や家族の人々のみの問題としてではなく広く、地域社会、国民全体の問題として取り組んでいかなければなりません。